

1	会議名	交流・文化施設等運営管理計画検討委員会 美術館委員会
2	日時	平成23年1月28日(金) 午後2時から午後4時50分まで
3	会場	上田市役所本庁舎3階 第一応接室
4	出席者	滝澤委員長、結城委員、小山委員、宮下委員、山崎委員、小林委員
5	市側出席者	伊藤交流・文化施設建設準備室長、中部文化振興課長、 室賀交流・文化施設建設準備室長補佐、若林室長補佐、滝澤文化振興課長補佐、 小笠原主査、掛川主査、徳田主査
6	公開・非公開等の別	公開・一部公開・非公開
7	傍聴者4人	記者2人
8	会議概要作成年月日	平成23年2月2日
協 議 事 項 等		
1	開会 (伊藤交流・文化施設準備室長)	
2	会議事項	
	(1) 事業展開、運営管理の基本的方向性について	
	委員長：	資料1を踏まえて、次第の①のア～オまで一通りご意見を賜りたい。
	委員：	郷土作家のどの作家を常設展示的に顕彰展示し、企画展示とするのか議論をしたい。
	委員長：	整備計画の議論で、完全に固定された記念室にするのではなく、企画展示室の一部をそうした常設作家の展示に使うこともありうる流動的な形で展示したほうが、多くの市民に愛される美術館になるのではないかという議論があった。この件について、ほかの委員はいかがか。
	委員：	補足しておきたいが、石井鶴三の作品を上田市に寄贈してもらうときの条件に、石井鶴三単独の常設展示をするという条件でいただいているというように聞いているので確認願いたい。
	委員長：	専門委員から、石井鶴三、山本鼎等の上田を代表する作家に対して、外から見た視点という意味でいかがか。
	委員：	面積が十分あればそれぞれに記念室を作っても良いぐらいだが、財政的にも面積的にも限られてきてしまうのが現実。また、常設展示で固定してしまうと、全館を使って大規模特別展の場合、その部屋は異質な部屋になる。今回の場合は、たとえば、山本鼎を集中的に展示し、その間に石井鶴三の準備をして展示替えをするというサイクルでまわしていくということも考えても良いのでは。
	委員：	リピーターのお客さんに何回も来てもらうというのも目的。作家それぞれが最低何枚かは常設展で見ることが出来、企画展示をしていない時期を企画展示としての山本鼎というような形で、今度は全部見られるということが楽しみになるような企画展をうまくつけていけば少しは解決できるのではないかと思う。
	委員長：	今、山本鼎のおおよその入場者数は。
	事務局：	上田城の櫓と同じチケットで入るようになっていて、年間43,300人ほど。
	委員長：	展示できる作品数の10倍以上がなければ展示替えでとても持たないということがある。彫刻は、環境が良ければ常に出しておけるが、スケッチとか写真は、かなり頻りに展示替えをしなければならなくなる。たいていの方は2度も3度も常設室を見るということがない。偉大な先生方ではあるが全国的に多くのお客様を動員するのは実際にはなかなか難しいし、むしろ市民の皆さんが使っていく美術館という形で大局的にはならざるを得ないと強く感じている。
	委員：	例えば石井鶴三先生の作品はあのスペースだと年間通して展示替えをして、やっと一通り展示できる。そういう点で企画展と併せて、作品を出来るだけ広く見てもらう。
	委員：	上田市がこの美術館を作るといふ一番根底にあるものがきちんと理解されていないというか座っていない気がする。石井鶴三や山本鼎の思想精神を21世紀の現代に再び蘇らせる、その点をお考えいただきたい。
	委員長：	現在までおおよその設計や事業方針を進めてきた、そのたたき台になった会議も、そういった日本における近代美術教育の聖地であるという言葉も出た。きちんと顕彰するとともに、その精神をさらに拡大的に事業に盛り込み、広げて行きたいという理念が反映されている。ただ、それほどすばらしい作家であるということをお客さんに日本における聖地であるこの上田市の上田市民が感じていない。それをどういった形で今後展開し浸透させその精神の波及に努めていくか

ということを考えていかななくてはならない。

委員： この事業方針、事業内容に出てこない言葉として、調査研究がある。調査研究を館の業務として行う、人を充て、予算を確保するということが出来るかどうか。地に着いた活動をしていくには、館の活動として認めていただかなくてはならない。

委員長： 常設はただいつも同じものだと思っている人が多い。常設とは何かといったときに固定的なものではない、むしろ企画展を生かしていくというようなこともありうるのではないか。

委員： 思想精神を現代によみがえらせる大きな目標に沿って、企画がなされていくと思う。それがこの美術館における企画展を企画していく大きな柱。また、収集ということになると、収集方針を据えないといけないと思う。

委員長： 市の事業方針としては、郷土作家の名前を挙げているが、これに関連したものを調査研究、収集していこうという意図がある。

委員： 今回一番の目的は、郷土の作家を研究し広めていく動きと、開かれた美術館にということとは矛盾する場合もある。女性が、美術館に行く理由は、山本鼎の絵を見に行くわけではなく、単に新しいところに行ってみたら良かったということが多く。常にお土産を買うのも女性。開かれた収益性も追求するのであれば、女性がたくさん来てくれる美術館にするのが、ひとつの目的。近代美術教育の聖地という理念も守らなくてはならないが、例えば近代教育が今の私たちにどう関係しているかという視点。ミュージアムショップも広げたい、ミュージアムショップ等の収益を収集にまわしたりするために、割り切った設備のほうが、結果的に教育の聖地であることの方に使えるのではないか。

委員： 子どもたちにもわかる、それからお母さんがたも行ってよかったねと思える企画を考えて、学校を通してのチラシ配布、啓発活動、広報活動にも関係していく。冬場は版画の学習が始まっているので関連付けて、教育と関連付けた鑑賞も出来るかなと思っている。

委員長： 美術館の建物とソフトを通じて、市民の皆さんに伝えていくには、発信していかないとどうしようもない。単にハードとしての記念室ということだけではなく、企画展示室、それも狭い意味の企画展示室ではなく、企画展示室も含め重要作家の企画展を行って、教育界も巻き込んで発信していくというような運用の仕方と考えていけば、むしろ立派な、硬い形での常設室よりも良いのではないかと感じている。

委員： 子どもたちのアトリエはなぜ作るのかということになるが、その根底には、自由画教育運動がある。

委員長： 活動方針の中に郷土作家の顕彰、そして常設展示と書かずに郷土作家の顕彰企画展示という表記になっているのは、そういった議論と精神を結びつけたものであると思っている。おおむね皆さんと矛盾しない、問題はこれを如何に運用していくか。

委員： 学芸員的に、全体の中でパーツ分けをしてどこかに力点を置いていく、そういうことをしていかないと、この美術館のこういう点を大事にしてもらいたいということが伝わってこない。

委員： 調査研究をする方にいきなり子どもをつれてきて、説明しろといっても難しい。子どもたちが小口木版とは何なのかを1つ知っただけでも、山本鼎記念館に行ったことの価値であるというぐらい、敷居を下げながら、人材をそろえていく必要を感じている。

委員： 今この場に学芸員が本当はいなければいけない。

委員： どこの公立美術館でもそうだが、学芸員は最後に連れてこられる。開館して雇われて、まだ何も見ていないのに説明させられたりすることになりかねない。

委員長： きちんと館として責任もって行く、ということが根幹。まとめると、上田の美術館においては、郷土作家の精神を顕彰しそれを常設展示するとともに、さまざまな活動、企画展とか、山本鼎記念版画大賞等を単にハードに生かすのみならず、ソフトの面で人の配置や活動を含め、郷土の先人の精神を尊重して、活動の核の1つとしていく、ということよろしいか。

委員： (了承)

10 分間休憩

委員長： 企画展示室について、ご意見をいただきたい。何にでも使えるというのは大事なことで、現代美術の巨大なものが置かれても遜色なく、一方で農民美術とかの資料的に見られてしまうようなものも生かせるようなケースも必要。現時点では無個性のほうが良いと思うが、いかがか。

委員： 企画展示室の活用について、市民の皆さんにどんな展覧会をしたいのか、アンケート等で興味を持ってもらうのも良いのでは。ファッションショーが出来るような空間も作っていただき

たい。ホールも美術館のようなホール、美術館といっても堅苦しく閉ざされた美術館でなく作っていただきたい。

委員長： 私も賛成で、市民に開かれつつ市民に支持される美術館を作るには、アンケートは必要だと思う。先ほど非日常的な空間が大事だという話もあり、今の話と結びつく。服飾美術館展といったものが出来るような非日常的な空間についていかがか。

委員： 工芸の方向に落として行って、後継者を育てるには、全国に売れるような作品作りをやり、後継者を育てながら新しい工芸も作る、というような欲張った発想を持ってファッションを持っていけたら良い。暮らすこととアートみたいな柱の企画展もたてられるのではないかな。

委員長： 学問的には峻別されていたが、日本における工芸は生活と結びついたもので、山本鼎の農民美術における生活と絡むという形では美術館の柱の中に工芸という視点が入っても良いかと思う。広い意味での生活と美術というようなものが目指していければと思っていた。

委員： コーナーにインテリアアートみたいな、インテリジェンスがあつて、インテリアにもなるアートみたいなものを一箇所においておくというような、そのくらいのところもあると女性としてはそっちに買い物に来たときに美術館に行く、そのくらい本気でやらないと、集客は難しい。

委員： それはあつと思う。子どもに佐久市立近代美術館に行くか、御代田のメルシャン美術館に行くかと聞けば、メルシャンに行くかと答える。あそこはミュージアムショップが広く、喫茶店もあり、展示室はそれほど大きくない、外の庭もきれい。企画展示室は、いろいろな夢のような空間を作るためにこそ、何も無いプレーンな空間が必要だということも一方である。しっかりしたプレーンで機能をちゃんと備えた展示室が必要ではないかと考える。

委員： 子どもたちは作品を見てもずっと見ているわけではないので、ちょっとした空間があつて、美術なり工芸なり郷土の農民美術を子どもは好きかと思う。子どもたちがそこに

いても飽きない、また行ってみたいというようなスペース、空間を作っていけないといけない。

委員： 金沢 21 世紀美術館は当初から前掛け絡めて入れる美術館という敷居の下げ方をコンセプトに掲げ成功した。金沢は現代アートだったので、割烹着と現代アートの落差が面白かったが、今回は、音楽ホールと接しているのでもそ行きを着て行きたい美術館にしたほうが良いのかという気がする。親しみやすい地元密着型にするのか、おしゃれして行ってみたい美術館にするのか、それぞれお考えいただきたい。

委員長： 子どものためにというときに、野放図に子どもに合わせるわけではない、パブリックな空間はどういうものかということを読んでくることがある、敷居の低いということは言うのは簡単だが、子どもを尊重するから子どもを大人扱いする、そういった視点も大事。

委員： 女性をどう呼ぶかというのも考えている必要がある。一番信用できるのは地域のご婦人の口コミ、それをどうやって育てるかということ、準備段階から、意見も大事に聞いて返してやるということによって地域の口コミを高めていくと聞いた。開館のときにどうやってその魅力をおかしてもらえるか、パンフレットだけでなく、少し種まきをしていく必要があると思う。

委員長： シティ雑誌、口コミ紙の人たちと一緒に企画をしたことがあるが、やはり女性がターゲットで、その女性からは意見を聞いてくれるおしゃれな店というのが人気。非日常的なよさがありながら敷居が低いという点で意見を聞いてくれると言うのは大事だと教えてもらった。

委員： 前回示された基本設計の図面ではわからないところだらけだが、美術館は美術館で、ホールはホールで閉じられているので、せっかく一緒にあるのだからもったいない。2 階の部分で美術館から大ホールのホワイエを繋げ広いスペースをとり、その円形の部分にミュージアムショップ、カフェレストランを位置づける。市民ギャラリーの広さは 200 m²ぐらいで、2 階の常設展示の横に持ってくる。一番身近に使い、一番人が来る市民ギャラリーを 2 階に持ってくるとミュージアムショップやカフェが生きてくる。

委員長： 総論はそのとおりだが、県展等の場合の壁延長を最大として想定しておくべきではないか。市民ギャラリーと多目的ルームが広くかつ便利などところにおいてあるのは大規模公募展のため、一等地をかつ一番広いスペースを用意していただいているが。

委員： そういう展覧会をやるには、1 階部分のアトリエを展覧会のときに使うことが出来る仕様になればよい。交流というのは円形のスペースを交流のスペースに考えているのかと思うが、これをどのように活用できるか、設計者とつめていかなくてはいけない。

委員長： 交流プロムナードを展示室としても使えるようにして欲しいという要望を当委員会でも要望としてでたということにしてよろしいか。

委員： (了承)

委員： 今までの検討の中で美術館 2500 m²と決まった時に交流部分で展示スペースをある程度確保

するということをお願いしたので、今のようなことが考慮されていると思っている。

委員長： 私の聞いているところでも、純粋な美術館でない交流部分も美術館仕様に準じ、100%空気が効くということではないが、子ども全員ののめが見たいというときにプロムナードを利用して展示できるので、交流施設に2400㎡とってあるが、美術館に引き込むことも出来るというように利用していきたい。

委員： 基本設計が進み、あまり進んで変更不可能のところまで行って意見を言うのは心苦しい。市民説明会をやって市民の意見を聞くというが、市民の皆さんがいきなり図面、模型を見せられても意見を言えない。設計者は市民の意見を聞いて、納得の出来るものは取り入れ、市民が理解できないことは、理解してもらうまで説明することでない、押し付けられただけと思われ、冷たくなってしまう。

委員長： 今回の設計事務所は比較的意見を聞いてくれそうなので、取り入れられるものはどんどん取り入れていければと思っている。大規模公募展の場合はどのくらいの広さがあればよいか、常設展示室や企画展示室を公募展で使わないとすればどのくらい必要か。市民ギャラリーと多目的ルームと場合によってプロムナードの一部を大規模公募展に使えないだろうかという想定で設計されて、今のところ市民ギャラリーと多目的ルーム併せて700㎡ほど確保してある。

委員： 図面を見ても具体的にはわからない。ここがパネルを立てられるのか立てられないのか。

委員長： 数百点の作品が並ぶといったことを想定して、大きな壁が動いてくるような空間として多目的ルームと市民ギャラリーは設計しないと困る、という話は伝わっている。

委員： 玄関の間口はこれでいいのか、入って正面が廊下なのもつまらない。玄関はお客さまを呼ぶところなので、少し考えていったほうが良いと思う。

委員： 上田の人にとっての玄関は駐車場側のエントランスが玄関だと思うが、大ホールに1700人ということになると、軽井沢とか東京から来るとしたら、玄関は小ホール側プロムナードの入り口だと思う。

委員： 美術館は美術館で閉じられていて、ホールはホールで閉じられているのではなくてその2つを繋ぐ広い空間があると、どこから入って来ても良い所になる。

委員長： 2階のプロムナードはホールと美術館を繋ぐことが必要。

委員： この図面で見る限り、物理的には可能。

委員： 具体的なことを出すのではなく、要望を出していったほうが、結果的に美しい可視スタイルが生まれるのではないか。

委員長： いずれにしても、プロムナードをホール側の意見も含めて、うまく使っていないと税金の無駄遣いといわれるので、これをどう生かすかというの、われわれの課題でもある。

委員： 工芸品をみんなで1週間とか即売会、青空市みたいに市を立てたりできる。

委員長： 設計者もそれは考えていると思う。美術館のほうで積極的に使っていきたい。美術館として使うとしたら、少なくとも一方はある程度の壁面は必要。交流プロムナードをフルに活用して、可能であればホールと美術館を階段とを上下せずに繋ぐということは検討に値するという事で、意見としてまとめていきたい。

委員： (了承)

委員長： 大規模展が出来る面積は、ホールと展示の複合施設である県伊那文化会館に勤めていたころは、600㎡強にパネルを立ててぎりぎり県展が収まった、そうすると、700㎡の多目的ルームと市民ギャラリーはぎりぎり収まるのではと感じているが、東信美術展等はどうか。

委員： 伊那文化会館での県展は壁面が少ないために全部2段掛けなので、面積というより壁面が350~400メートルぐらい必要。そういう点から考えて、今のようなプロムナードを使えば可能。野外展示場も展示を出来るような工夫がされているので、県展の一部はそこにいくということも考えられていると思う。

委員長： 市民ギャラリーと多目的ルームは、大規模展をやると当然接していたほうが良いという意見があり、搬入等の実用的な視点から使いやすいようにという視点。玄関を何とか工夫すれば、市民団体の皆さんからすれば使いやすいほうが良い。

委員： ホールと美術館を繋ぐ2階を作ったほうが良いというのも、2階が出来ると見栄えは2階が無いほうが良くなる。どっちをとるか。

委員長： 建蔽率、延べ床面積の問題があるので、どこかを削らなくてはならなくなるかもしれない。

委員： リハーサル室は展示に使えるようにならないか。

委員長： それを考えるなら、プロムナードを使えるようにしたほうが良い。リハーサル室は美術館から離れているので、見に行ってもらえない。交流プロムナードを美術館仕様に近い形で、全面

的ではないが、8mの幅の部屋はかなりのものが飾れると思う。関連して、人事・組織について、館長を共通の館長を1人置くところがあるが、それについてはいかがか。

委員： 島根のグラントワの館長は1人。こんな小さな美術館で館長がいるかどうか。

委員： 水戸美術館も1人。

委員長 ホール美術館が一緒のところがあり、館長が2人いて、その上に総長がいて、非常に使いにくいという話だった、時代にも逆行する。規模からしても館長がホール側になる可能性が高いと思うが、問題ない。ここで意見を集約する意図は無いが、場合によっては館長は1人でも美術館側はよいと言うことで現時点ではよろしいか。

委員： (同意)

委員長 本日のまとめをすると、前半が地域の代表的な作家の顕彰をきちんとしていく。そしてその精神を生かす形で企画展その他、公募展等を含めて、具体的には山本鼎版画大賞のような、そういったさまざまなソフト面での活動を通して山本鼎ほかの精神を全国に発信していく活動をこの建物の中に生かして行きたい、ということ。後半は、開かれた敷居の低い美術館ではあるが内部は背筋を伸ばしたいような、非日常的な空間にもなりうる多目的な空間を企画展示室として生かしていく。工芸等生活に密着した美術もそういった精神を生かして展開していく。

建物については、可能性として、ホールと美術館がもっと有機的につながるようなもの、例えば、2階をつなげたようなものが出来ないか、というような提案をしてみる。市民ギャラリーや多目的ルームをもって大規模展に対応していくが、できるだけ交流プロムナードも展示空間として生かして大規模展にも対応して行き、市民の皆さんの作品を気軽に見てもらえるような空間として生かしたい。組織としては、館長は軽くして、実働的なところに力を入れて行きたい。というのがおおよその方向としてよろしいか。

委員： (同意)

(2) 委員会の開催予定について

事務局： 第3回美術館検討委員会は2/10(木)午後1時30分からとしたい。

委員： (了承)

(3) その他 (なし)

6 閉会

* 会議概要は原則として公開します。会議終了後、1週間以内に行政改革推進室へ提出してください。

* 非公開及び一部非公開としたものについては、その理由を記載してください。